

分科会 C 記録

日 時：平成 24 年 5 月 25 日（金）（13：30-15：30）

場 所：日本科学未来館 会議室 3

テーマ：医歯薬分野における日本型電子出版の課題

（日本薬学図書館協議会との共催で開催）

参加者：122 名（講師等 4 人を含む）

座 長：株式会社サンメディア常務取締役 松下 茂 氏

話 題 提 供 者：株式会社医学書院取締役副社長 金原 俊 氏

東邦大学習志野メディアセンター 谷澤 滋生 氏

コメンテーター：関西医科大学教授 山田 久夫 氏

コーディネーター：東邦大学習志野メディアセンター 谷澤 滋生 氏

記 録：（公財）東京都医学総合研究所 鷹野 祐子

議事要旨

1. 座長からテーマの紹介（松下 茂 氏）

昨年の分科会「オンラインリソースのゆくえ」では、電子出版の今後について、をテーマにセッションを行った。それ以後、JMLA と日本医書出版協会で、3 回ほど日本国内における電子書籍と著作権について話し合いをされてきた。その中で、JMLA と日本医書出版協会で考えていることはほぼ同じであろう、一緒に考えていく機会を設けていこう、ということ、で、昨年に引き続き、この分科会を設けた。

2. 「図書館の立場から日本型電子出版をさぐる」（谷澤 滋生 氏）

まず、日本医書出版協会との話し合いの経緯について説明する。2010 年 3 月に東邦大学の新聞紹介システムの開発について、日本医書出版協会と打ち合わせを開始した。それを契機に 2011 年 9 月に JMLA 分科会 A「オンラインリソースのゆくえ」を開催、2011 年 12 月から定期的な話し合いを開始した。

電子出版の現状は、個人販売モデルが中心で、機関（図書館）を販売対象とする機関販売モデルは未整備（全体の数%）である。また、現状の販売実績を確保・維持しつつ、機関販売を進めることが命題であることが確認された。電子出版のビジネスモデルとして、電子ジャーナルはブランドイメージが確立されているが、電子ブックはまだブランドが確立していない。会計的な見方からは、電子ジャーナルと同様に、前払いが適用できるのは、外国で出版された図書だけである。提案できるビジネスモデルは BigDeal モデル、FTE モデル、Subject モデル、個別契約モデル、Pay per View モデルなどが考えられる。印刷物とは違う電子的資料の利用のされ方から、教科書、個人学習用、参考図書、白書等定期刊行物など、多様なビジネスモデルが必要と考えられる。また、機関の規模、分野によっても使われ方が異なってくる。

日本型電子出版の実現へ、話し合ってきたが今現在はお互いの状況がわかったところで平行線が続いている。なにか一歩踏み出せば、きっかけがあれば進んでいくと思われる。

医学書の図書館機関のバイイングパワー、個人販売への影響、機関が支払える費用はどのくらいか、どのくらいが適切なのか、図書館が支払うか、大学が支払うか、それを交渉する意欲があるか。出版は現状を維持できるのか、BigDeal モデルにおいて電子ブックの内容の重複を許容できるか、データベースや電子ジャーナルが進んできた過程（飛躍）を、電子ブックでも新たなビジネスモデルとして構築していけるか。拡大スパイラルモデルとして、うまくいかなかったらビジョンから考えなおし、電子出版をすすめていきたいとおもっている。

3. 「施設への日本語電子コンテンツ提供のために」（金原 俊 氏）

日本医書出版協会の電子出版委員会副委員長という立場で話をする。協会（JMPA）は50周年、29社で組織。われわれは「医学・医療の発展のためにそこに従事する人に的確な専門情報を提供する」という手法は異なるが、共通の使命をもっている。昨年12月から定期的な話し合いをしており、電子化部会と著作権部会で話し合っている。著作権部会は別の機会に話したい。

図書館のなかで日本語の電子コンテンツがない、提供されていない、という問題について、両協会の協力で日本の電子コンテンツの提供を促進していきたい。電子化をするうえで障害として技術的、著作権、資金、出版社の意識などがあげられているが、どれも障害ではない。実際に個人向けの電子配信は拡大している。日本の医書市場は図書館購入が数%で個人購入が95%である。図書館施設への電子コンテンツの提供は、個人市場の維持への対応が鍵となる。

それを解決するモデルとしてよく言われるのが、同時アクセス1モデルだが、紙媒体の図書館利用と似ているが、共有機能がより高く、個人市場への影響が心配である。特に新刊は難しく、価格の合意が難しく、提供ができない。また、FTEモデルでは、電子共有により個人市場を施設価格で補完するが、図書館予算が増大し、実現が難しい。新しいアイデアとして、ひとつは従量制（章単位での印税処理に問題）、さまざまな料金制度を設けるなどアイデアが出ている。現在、何がいいかという結論は出ていない。今日みなさんからの意見を聞き、話し合いを進めていく。図書館側としては、便利でリーズナブルで安心していつまでも使える、出版社側としては出版コストが回収でき、個人市場を維持もしくは個人市場をふくめた全体の維持ができる。いずれにしても、両者の提携が不可欠で、両者の事情を率直に話し合い、欧米型とは違う実現可能な日本型のビジネスモデルをつくっていきたい。

最後に日本の出版社の将来として、図書館システムにシームレスにデータを供給し、学び、ナビゲートしていくシステムが要求されるだろう。それには各出版社・提供者が個別につくるのではなく、出版社を横断する合同プラットフォームを業界でつくろう、と話している。両協会の密な連携が必要とされている。

4. コメント（山田 久夫 氏）

個人会員として一教員のつぶやきを述べる。興味があって、担当している教科で、学生が使う教科書について、新品、中古、コピー、図書館貸出などアンケート調査した。ダウンロード版の利用なども調べてみた。その結果、必ず本を買う人は買っている。複数持っている人もおり、使い分けをしている。本離れをしているかと思ったが、学生は最低限の

ものは買っている。携帯電話の使用についても、ここに来て、スマートフォンで講義の写真をとることが多くなったように、デジタル物の受けがいい。しかし一方で、大学講義の資料はイントラネットにアップしているにもかかわらず、ノートPCで閲覧しないではほぼ全員がプリントしてもってきている(スマートフォンでは見難いからか)。

医学部では、教科書・マニュアルのオンライン化が必要とされている。紙媒体を持ち込めない特殊環境が多い、最新版のみが必要、ちょっと見たい他の分野の資料をPCで見たい、医学生には教科書を読ませたい、などの理由から大学相手には機関購読をやってほしい。医学書院の標準シリーズなど日本で唯一の医学生むけの教科書であると思うが、数年で改訂されていくので、図書館がデジタル資料に冊子体の3倍の支払っても予算がとれるであろう。iPadなどを利用した電子資料化など、大学での施策にはいろいろな予算があるので、それを活用して行ってほしい。オンライン資料になることによって、他の資料の掘り起しがおきるし、冊子での購入もあるだろう。いくつかの販売モデルを展示してほしい。本は生涯物であるが、電子コンテンツは卒業したときの継続購入を考えていったらどうか。理学療法分野の専門学校では案外資金が豊富で図書室資料には予算が割けるのではないかと。シンプルシリーズなどを教科書として強制的に購入させている。ダウンロード・買い切り方などもっと活用できるのではないかと。教員用なども出版側からのデータでは個人購入にカウントされているかもしれない。

過渡期の今がビジネスチャンスである。自炊との差別化を考え、索引、マイページなどの機能を持たせてほしい。

5. ディスカッション

5-1 両協会の図書館向けのビジネスモデルについて成功しつつあるのか？

谷澤：成功かどうかはわからないが、お互いの相互理解ができた。現状は平行線ではないか。

金原：目的は一緒だが手段が違う。違いを認識した。日本の出版社は図書館に認識が少なかったが、一緒にテーブルにつき、出版社が図書館を認識したと思う。話し合いは結論に至るプロセスとして必要である。

5-2 電子書籍を図書館で扱っていることについてご意見ありますか？(会場挙手なし) 図書館で電子書籍をサービスしていきたいということでしょうか。医書出版協会に参加されていない出版社からの電子コンテンツを利用されていると思うが、今日の発表を聞かれて、利用者にアクセスだけ、ダウンロードさせる、ダウンロードしたものを再利用する、マイページの機能など、みなさんどういう機能をご要望されているか？(会場挙手なし)。すこし自由にご意見を受け付けます。

5-3 欧米の場合は機関販売モデルが成り立っているということだが、なぜか？(武田薬品 土井氏)

金原：STM の情報においては、徐々に施設への購読が増えていると聞いている。個人購読が減って価格が上昇する、価格が上昇するとますます個人購読が減る。

松下：会場にお詳しい方はいらっしゃいませんか？

スエッツ 深田氏：ひとつは、ジャーナルの個人購読が減った。本に関しては、個人的に

は、日本では本を個人で持っていることに価値がある。欧米ではそういう感覚がない。図書館にあればよいという感じである。昔はハードコピーとペーパーバックという二つの形態で出版されていたが、最近は多くが、ソフトバウンドになってしまった。

5-4 利用者側と出版社側の話し合いにおいて、あるところで話し合いが止まってしまったとおっしゃっていたが、その原因は何か？（第一三共 山村氏）

谷澤：図書館側は、環境は整っているので、できるところから始めたい。提供してみてもほしい、と話している。具体的な価格の検討は、別のテーブルで検討すべき。出版社が心配しているのは、個人市場が維持できるのか、というところで、その一步が踏み出せないのではないか。

金原：お互いの事情を話し合い、理解をしているが、具体的なモデルになると合意に至らない。

松下：本日のテーマの本質であるが、図書館は提供を待っているが、出版社が慎重になっている。図書館のみなさんからの参考になるようなご意見ありませんか？

日本大学 磯川氏：レンタルという概念はどうでしょうか。ダウンロードして数日たって消えるようなものであったらいいのでは？メディカルの本は部分をみるので、そういう利用者はいるし、よく使う人は買うのではないか。学生は買う人は買うし、買わない人は買わない。DVDのレンタルは本と根本的に違うのか？

金原：レンタルは面白いかもしれない。初めて認識した。見た分について課金するというのでしょうか？

日本大学 磯川氏：図書館には冊子体と同じ価格で提供し、利用者が貸出返却をすることです。

金原：そういうモデルも検討していきたい。図書館側ではどうか？

谷澤：図書館で貸出というモデルは提案をしています。

5-5 冊子体と抱き合わせというモデルはどうか？（慶應義塾大学 酒井）

金原：過渡期の中ではいいともう。最終的にはかわってくるかもしれない。

5-6 地方の臨床現場の先生からは電子資料を増やしてほしい。地方なので、現物が見られない。発売と同時に少し見せてほしい。診療現場ではセキュリティーのため、ネット環境はあるものの外部のページを見に行けない環境も考慮し、ダウンロードして iPad で見られるといい。医療現場は新しいものが好きである。新しい本を買うと、先生方は気に入ると大量にかったりする。図書館を書店のサテライトとして電子書籍を検討してほしい。（静岡がんセンター山崎）

金原：個人市場の維持ばかりではなく、購入に結び付くかもしれない。見本の提供やなるべく新刊を提供していきたい。日本の出版社に広めていきたい。

5-7 JMLA の理事として話し合いに参加してきたが、図書館の方向性、期待しているものは、図書館の種類、規模で違うと思っていたが、方向性は同じと感じた。今後 JMLA 加盟館にアンケートを取らせていただき、出版側に提示していきたいと思う。協力をお願いいたします。（東邦大学 児玉氏）

5-8 ユーザー側からすると、一つのプラットフォームで提供してほしい。(京都大学 加藤)

金原：JMPA で、共同で立ち上げようとしている。

松下：同一のプラットフォームも必要だが、一方で競争も必要である。プラットフォームの必要要件を利用者と出版社で決めていければと思う。最後に発表者からひと言。

谷澤：JMPA と JMLA の交渉をみなさんに明らかにできた。図書館の方は意見があれば、JMLA に言って欲しい。

松下：JMPA と JMLA の話し合いは始まった。これから課題を解決する段階である。今回いろいろな意見・ご提案をいただいたので、出版社と対立するのではなく、平等になって、また利用者の先生方と手を携えて新しい日本のデジタル書籍の夜明けを作っていくということが大切であると感じた。この話し合いについては、報告書が出るようですので、次の取り組みを期待してほしい。

以上